

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 川へ公共事業を見に行く
- 連載 矢作川今むかし①
—お釣土場水辺公園に立つ石柱—
- 今月の一枚
- 平成14年 献上鮎料理 顛末記 2
- 研究所の調査風景

2003 March
No.59

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/yahagi/index.html> e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

川へ公共事業を見に行く

野崎健太郎・寺崎万佑子・伊藤里奈・野崎妙子

現在、高速道路建設に代表される大型公共事業の見直し論議が盛んになってきた。多額の税金が投入される公共事業は、利潤を目的とする私企業の事業とは異なり、広く国民全体の利益となることが目的である。従って、本来は歓迎されるべきものであろう。それが近年、国民から疑念を持って見られるようになったのは、“公共”の心を忘れ、一握りの人々の“私利私欲”を優先した事業が散見されるようになったからである。

さて河川において見直しが叫ばれる公共事業は、何と言ってもダム・堰の建設である。市民は納税者として、この是非について自ら考えることが重要となる。それには実際に現場に赴き自らの目で批判的に眺めることが必須である。我々は、岡山女学園大学人間関係学部の講義であるケースメソッドⅡでこの課題に取り組んだ。以下は受講生の見た川と公共事業である。訪れたのは、長く激しく続いた反対運動を無視して1995年7月から運用が開始された長良川河口堰と、最近、工事着工が、事実上決定された豊川の設楽ダム建設予定地である。

長良川河口堰と情報公開

伊藤里奈

長良川河口堰には水資源開発公団による広報施設「アクアプラザながら」がある。ここでは豊富な展示やビデオで長良川河口堰を紹介しており、いわゆる環境教育の場である。

ここで見た河口堰の建設目的は、主に治水となっている。その根拠として、地域の住民が古くから悩ま

れた水害の歴史が挙げられている。確かに河口堰周辺は、長良川・木曾川・揖斐川が網状に流れ、伊勢湾との高低差に乏しい低地であるために洪水が頻発する地域であった。江戸時代から堤防作りなど治水工事が繰り返行われてきたが、水害は絶えなかったようである。水害を防ぐには、河川水を素早く伊勢湾に排出する必要がある。そのために長良川の川底を掘り下げ、排出流量を増やすことが考えられた。しかし、掘り下げは逆に海水の進入を許し、塩害の拡大に結びつく。

海と川とを遮断する長良川河口堰はこのジレンマを解決する事業として紹介されている。しかし、本当にこれで良いのだろうか。もう一度展示を良く見ると、河口堰建設の計画発表以降、大きな洪水は起きていないようであり、塩害の被害も実際のところ明瞭ではない。しつこいほどの音声解説が、この事業の正当性を訴えてくるが、冷静に眺めれば疑念を持たざる

長良川河口堰



を得ない。

この河口堰は「環境に優しい」がキーワードになっているが、本当に環境に優しいのであれば、建設への反対運動が起きるはずがない。問題点も多々発生しているのである。例えば魚類の減少などである。私は、河口堰の公式ホームページや「アクアプラザながら」による情報と、それに反対する本などに書かれている内容があまりにも違うことに驚いた。環境問題の解決に向けて重要なことは「情報公開の原則」であるが、「アクアプラザながら」は、河口堰が持つ正の面のみを強調し、負の面は触れていないように感じた。巨大なこの構造物が長良川流域の自然や流域の住民生活に与える負の影響は明確なのに、利点ばかり述べていたのでは、本当の環境問題の解決に向けて議論していく状況にはならない。利点と欠点を包み隠さず公表してこそ、真の環境教育・環境問題解決への第一歩だと思うのである。

設楽ダムで失うもの

寺崎万佑子

矢作川の隣、三河地方の東部を流れる豊川。その豊川上流域、田口では現在、設楽ダムの建設着工が事実上決定した。私たちは2002年11月16日に、この設楽ダム建設予定地を見学した。現地周辺は戦後植林されたスギやヒノキに取り囲まれていたが、所々に紅葉が顔を見せ、美しい空間を作り出していた。私は水没が予定される標高450メートル地点に立ち谷底を見下ろした時、その予想以上の高さに、奪われる自然の大きさを実感し驚いた。



設楽ダム建設予定地



設楽ダムが造られればここは水没する

設楽ダムは、農業・生活用水の供給、洪水の軽減、渇水時の流量確保、この3つを目的として建設される。ダム建設の目的に洪水の軽減とあるので、豊川は規模が大きいと想像していたが、思っていたよりも川幅が狭く、水量も少なかった。実際の洪水の被害がどの程度のものであるのか、あるいは本当に洪水が起こるのか想像がつかないほどの水量で、ダムを建設すると下流には、ほとんど水が流れなくなり大きな環境変化が起こることが予想される。

水没地域に住む人たちは、地域の自然と共に長く歩んできたが、いずれはそこを立ち退き、今までとは異なった環境で新しい生活を始めることになる。そのことを考えると、ダムによって利益を受ける下流域の人たちは、被害を受ける上流域の人たちの心情を理解する努力をしていかなくてはならないと感じる。川の流れは上流と下流の人の心を結んできたと言えるが、ダム建設によって、川の流れとともに人の心にも断絶を生む恐れがある。建設後のダムの様子を知るために、設楽ダム建設予定地とあわせて見学に行った矢作ダムでは、ダムの真下に今も生活続ける集落の姿が心に残った。それは何とも危険な光景で、今現在もダムへの無言の抵抗が続けられているかのように感じてしまった。

長い歴史の中で、我々人間はそのときの欲求で動き、後にかげがえのないものを失ったことに気づくということを経験となく繰り返してきた。設楽ダム建設でも、水需要を満たすために安易に動き、将来、取り戻すことのできない貴重な自然を失うかもしれない。水需要はダムに頼らなくとも、豊川用水の有効利用、水を利用する側の節水意識を高めることで、解決の糸口になる方法を探っていきたいものだと感じた。

(のざき けんたろう・てらさき まゆこ・

いとう りな、椋山女学園大学人間関係学部、

のざき たえこ、豊田市東梅坪町)

連載 矢作川今むかし ①

川の門番—お釣土場水辺公園に立つ石柱—

小川 都

豊田市越戸町の矢作川の堤防道路を歩くと、竹藪が切れて河川敷へ降りることができる細い道があります。その道を進む



写真1
公園側から堤防道路を見る。
石柱中央に板をはめる溝が見える。

と、二本の石柱が立っています(写真1)。地元の方に聞くと、かつてこの石柱は、背後の堤防に図のように埋められていたそうです。この辺りは、ちょうど土場(矢作川水運の、舟荷を上げ下ろしする所)と問屋を結ぶ道とが交差していました。大八車などで荷を運ぶ時に障害となるこの部分の堤防は、切り取られたか、もしくは他の部分よりも低く作られ、その箇所に石柱が埋められたようです。また石柱をよく見ると、両方の石に幅約5センチの溝(角落し)が通っています。これは矢作川に洪水の恐れが出た時、石柱に板をはめ込むための溝です。

現在もその板は残っており、板に書かれた文字から(写真2)、土場に面したこの場所のための板だということや、四枚揃いであることがわかります。しかし、この板を活用するような事態はめったに起こらず、板を管理するお宅で生まれ育った中根勝さん(大正10年生)でさえ、この板を使った覚えがないとのこと。伊勢湾台風の時、もはやこの板の存在を集落の人たちが知らなかったために、柱の間は俵やカマスを使って埋めたそうです。

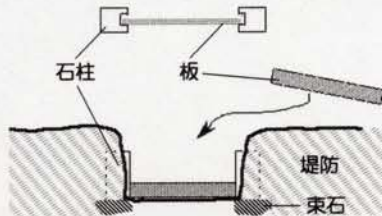


図: 石柱の上面と側面
石柱の下にはさらに束石(柱を支える土台)が敷かれ、これにも溝がはいっていた。

写真2 「土場専用 四枚内其式」とある
(現在4枚中2枚は矢作川研究所が所蔵)。
173.5×22.7×2.5cm

石柱が埋められた時期も、勝さんや中根栄さん(大正15年生)が物心ついたころにはすでにこの形になっていたようで、よくわかりません。ただ石柱が、問屋と土場を結ぶ道のための工夫であることを考えると、この地で土場が発達し、かつ堤防が築かれた江戸時代中期(1700年代頃)に今の形になったと推測できます。その後この石柱は今の堤防道路を作る時、堤防の段差とともに埋設する計画だった所を、栄さんが堤防の脇に掘り出しておいたそうです。そして数年間竹藪の中で眠っていたのちに、この場所が「お釣土場水辺公園」として整備される平成8年に藪の中から見つけられ、現在に至ります。

勝さんや栄さんは、かつては洪水のおそれがある時も、「今の様に(避難勧告の)広報車が来てあわてて避難するという事はなかった。みんな川に出て行って、あかんくなると誰かが大騒ぎしてなんとかしよった」と言います。伊勢湾台風時の俵積みも川辺の住民が「なんとかした」結果だと言えます。

堤防を越えやすくすると同時に、万一の時の水防対策が施されたこの石柱は、人と川との暮らしぶりを示す証人です。石柱は今日も門番のように、矢作川と私たちの日々を見つめています。

*当記事は、豊田市越戸町の中根勝さん、中根栄さん、中根エツ子さん、藤井泰雄さんへの取材結果によっています。ご協力ありがとうございました。

(参考文献)

愛知県(1980)愛知の林業史, 愛知県.

豊田市郷土資料館(2002)特別展「川をめぐる暮らし」, 豊田市.

(おがわ みやこ、豊田市矢作川研究所 研究員)

今月の一枚

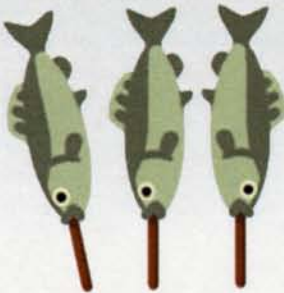


林床のシヨウジョウバカマ
— 豊田市野見山町にて
(二〇〇二年四月 洲崎燈子 撮影)

今回は、江戸時代の献上塩鮎を、今風の調理の手
 法で料理してゆくという作業が、約250年の歳月を
 経て新たに実施された模様を記した。私が考えても
 みなかった歴史の流れに引き込まれた、あるいは現
 実に過去を引き寄せた感覚である。眠っていた感性
 が起き、心の旅を始めたようだ。鮎を好きで釣って
 いるだけの私が、ますます鮎を好きになる価値の発
 見でもあった。

これまで博物館などで幾つもの歴史展示物を見て
 きた。パンフレットなどを読み、いくら史実だと
 の知的認識が移植されても、その史実を実感できる機
 会はそうそう訪れるものではなかった。現代に生き
 る私たちは、知識の向上に貪欲であればあるほど、
 悲しいかな、望んでいる体験から遠ざかる。伝統芸
 能の役者や、工芸品の作者の世界では、嫌というほ
 ど歴史の重みを味わわれるのだろう。しかし、こ
 こはもう格式の高い梨園の世界。下々の庶民的文化
 の香りは存在しない。

「献上塩鮎仕立方之覚」が、挙母藩内藤家の何某
 かによって、文書記録された。それは多分、品質の安定し
 た塩鮎を製造するための覚
 書にすぎなかったのであろう。
 誰がやっても同じ仕上がり
 になるようにという、担当
 の何某の周到な配慮がうか



平成十四年

献上鮎料理

顛末記

②

田中 藩

がえる。それは引いては、決して將軍家への非礼や
 不始末につながってはならぬ。それが藩の立場を安
 定させるのに欠かせない大切な行事の一つなのだ、
 という深慮と強い意思が伝わってくる。

覚書であったにせよ、文字になっていたおかげで、
 豊田市郷土資料館が今になって見つけることができ
 た。けれども江戸へ送られてからどのように料理さ
 れたかの記録は、まだ見つかっていないというでは
 ないか。

鮎と呼ばれる魚は、昔と違って今では高級魚の位
 置を降り、かなり大衆化され、今もまだ健在である。
 矢作川の近くでは馴染みの深い川魚である。昔から、
 いろいろと食材としての利用が考えられてきたに相
 違いない。私たちが通常食べるのは、塩焼き、甘露煮、
 昆布巻き。最近フライまで賞味できるようになっ
 た。さらに焼いて乾燥させたものを保存し、正月の
 お雑煮や、吸い物の出しに利用される。こうした調
 理法と同じやり方が、江戸時代でも日常的に行なわ
 れていたのだろうか。塩焼きなどはそうだろうと容
 易に想像できる。フライは洋風なので無理として、
 他の食べ方はあるいはあったかもしれない。しかし
 庶民が頻繁に鮎を調理し、膳を賑わしたほど裕福で
 あったかという、昭和に入ってから価格の高さ
 から考えてもかなり疑問である。そう簡単には口に
 できなかったのではないか。 (つづく)

(たなか ばん、豊田市矢作川研究所 研究顧問)

研究所の
 調査風景

1月25日(土)

奈良女子大学での研究会と翌26
 日中央大学での日本蛾類学会総会で、
 日頃の研究成果の一部を発表しました。
 今回はトリバガのHellinsia属という
 グループのシノニム(同種異名)関係
 を中心に分布も含めて発表しました。
 当日はその他生態、生理、フェロモン、

行動など発表内容は多岐
 にわたっていましたが、
 それら基礎研究の集積が
 自然現象を多角的に評価
 していく礎になることを
 あらためて認識しました。
 (間野)

2月13日(木)

平成14年度研究所シンポジウムが、
 東海農政局豊田統計情報出張所と(財)
 オイスカ中部日本研修センターとの
 共催で開催されました。今年は「流域住
 民でつくる水源の森」と題し、長年人

工林の再生と山づくりの指導を行っ
 てきた島崎洋路氏(島崎山林塾主宰)
 にご講演頂きました。環境省環境カ
 ウンセラーの篠田陽作氏をコーディネ
 ーターに迎えたパネルディスカッ
 ションでは、上流域の森林組合長か
 ら下流域の漁業関係者までさまざま
 な立場の方が発言しましたが、森林
 ボランティアの方たちの意気込みや、
 下流域の農業関係者の「山を守って
 ほしい」という切実な呼びかけが印
 象的でした。 (洲崎)

編集後記

人工林をとりまく問題は深刻です。しかし今年の研究所シンポジウムでは、矢作川流域
 にも熱意を持って森林の手入れをしている人が多く存在し、増える傾向にあること、多く
 の山林地主が、自分の山に入って手入れをしてもらってもいいと思っていることなどが分かり、木もれ日のよ
 うな一条の光を見た感がありました。(洲)

ご意見・ご感想をお寄せください